

# いたちの手ぬぐい

一

「いたちっ子、

いたちっ子、

いたちの手ぬぐいを見つけた。」



ある山国の村の子どもたちは、道を歩いているときいたちがちよろちよろと、  
前を横よこぎると、こんなうたをうたってはやします。このうたのわけは、こうな

のです。――

むかしむかし、いたちは小さな豆まめしぼりの手ぬぐいをもっていました。その手ぬぐいを頭にかぶって、その上を両手りょうてでこすると、たちまち、頭をおたばこぼんにゆった、かわいらしい女の子に化ばけるのでした。いたちは、この手ぬぐいを何よりも大事だいじにしていました。

いたちは、とてもうぬぼれやで、けものの中では自分ぐらいきれいな顔をしたものはいないと思っていました。

そのころ、村の人たちが夜づりに行きますと、川上の方で、いたちが今言ったような女の子に化ばけて

「あずきあらおか、人にとって食おか。

おたばこぼん…女の子のかみがた。左右に分けたかみのけのたばを合わせて、たばこぼんのつるのようむすぶ。

キン、シヨツシヨツ。

キン、シヨツシヨツ。」

と、うたいうたい行くのをよく見かけました。

あるとき、いたちはなかよしのたぬきのところへ出かけて、

「どうだい、おれたちも人間みたいに田を作って、米をとって、もちをこきえて食べようじゃないか。」と相談そうだんしました。そして、二人で、谷川のそばへ小

さな田をひらきました。やがてなえも出来ると、いたちは、

「たぬきどん、きよう田植うえをしようよ。」と、さそいに行きました。すると、たぬきは急きゆうにしかめつ面つらをして、おなかをきゆうきゆうおさえながら、

「ああいたたた。ああ、いたい。はらがいたいんだ。」

と、うなりました。いたちは、

「そりやいけない。じゃあおまえは休んでいるがいい。」と言って、ひとりで田植<sup>う</sup>えをすませました。

夏になってから、いたちは、

「たぬきどん、田の草をとろうよ。」と、さそいに行きますと、たぬきはまた、はらがいたくなつたと言って、うんうん言いました。いたちは、しかたなくまた一人で、草とりをしました。それから、秋になって、いたちが、

「たぬきどん、いねかりをしようよ。」と、さそいに行ったときも、たぬきはまたおなががいたいと言うので、とうとうひとりでいねをかりました。

冬のある日、二人は、とれた米でもちをつきにかかりました。いたちは、れ

---

いの手ぬぐいで、きりりとはちまきをして、きねをとり、

「山寺に、

山寺に、

小ぞうがいなくて、

さるに夜<sup>よ</sup>麦<sup>むぎ</sup>つかした。

ペツコロ、スツコロ、つかした。

はあ、ペツタンコペツタンコ。」

と、うたいうたいつきました。たぬきは、

「よいとこしよ、よいとこしよ。」と、かけごえをしながら、手がえしをしました。

---

おもちがつき上がりますと、たぬきは、これを二人で同じように分けて食ったのじやつまらないから、うすぐと山の上から転ころがして、早く追おっかけてつかまえたものが、みんな食うことにしようと言い出しました。

いたちはしようちして、二人でうすをかついで、山の上へ登のぼって、よいよいがけて、風のようにかけ下りました。いたちは、その後からひよこひよこ追おっかけていきますと、もちがうすからとび出して、とちゅうのいばらのえだにひっかかっていました。

たぬきは、そんなこととは知らないで、空っぽのうすをどんどん追おっかけています。

---

「私たちは、大よろこびで、もちをもつて家へかえりました。そしてすぐに大根だいこんおろしをこしらえて、もちを小さくちぎっては、おろしにつけて食べていますと、たぬきがまどからひよいとのぞいて、うらやましそうに、

「いたちどん、大根だいこんおろしよりも、さんしょうみそをつけて食くった方がうまいよ。」と言いました。いたちは、

「へん、おろしをつけて食くおうと、さんしょうみそをつけて食くおうと、おれの勝手かっだい。」と言いました。

たぬきは小さくなって、

「いたちどん、さつきは、おれがわるかった。そんないじわるをしないで、わたしにも少し食わしてくれよ。」と、ねだりました。いたちはたぬきを家へ入れ

てやって一しよに食べさせました。

二人はお腹なかがぼこぼこで、身みうごきもならないくらい食べましたが、まだあとに、どっさりのこっています。たぬきは、

「いたちどん、のこったこのもちでもち酒ざけをつくらうよ。」と言い出しました。いたちはよかろうと言つて、もちとこうじをかめに入れ、しぶ紙しぶがみでふうをして、ゆか下へ入れておきました。たぬきは、それから毎日まいにちやって来て、

「いたちどん、もち酒ざけはまだ出来できないかね。一人で飲のんでしまつちや、ずるいよ。」と言いました。いたちは、

「だいじょうぶだよ。おまいじやあるまいし、そんなたちのわるいことはしないから、安心あんしておいでよ。もち酒ざけというものは冬中かこつておくものだ。村

こうじ…米などからできたび生物せいぶつ。食品をはっこうさせる。  
しぶ紙…はって重かさねた和紙わがみにかきしぶ（しぶがきからとつたしる）をぬつたもの。



の祭りまつが来るころにならなきや、うまくならないんだよ。」と言いました。

二

そのうちに、長い冬があけて、ぽかぽかした春になりました。村の祭りまつももうじきです。

私たちは、もち酒もすっかりうまくなったろうとおもって、たぬきをよんで来て、かめのふうをとりました。いいにおいが、ふうんと部屋中にひろがりました。二人は大よろこびで、お酒さかもりをはじめました。

二人とも、いいかげんに、よいがまわったころ、たぬきが、

「いたちどん、せつかくのお酒さけにさかながなくちやつまらないね。一つ村のとやり屋へ行って、にわとりでもぬすんで来ようか。」と言い出しました。

「だって、この昼間にうかうか出かけて村のわかいしゅうに見つかったら大へんじやないか。」と、いたちが言いました。たぬきは、

「なあに、これこれこうすればいいんだよ。」と耳うちをしました。

いたちはすぐに手ぬぐいをかぶって、その上を手でこすって、おたばこぼんの女の子に化ばけました。たぬきは、りっぱなおさむらいに化ばけて、二人で村へ出かけました。

村のとり屋やでは、もう祭りまつも近いので、にわとりも大方売おおかたれてしまつて、たった二羽だけのこつていました。と、そこへ、おたばこぼんにゆつた、ついぞ見かけたことのない、かわいらしい女の子が、

「こんにちは。」と言って、入って来ました。

「おじさん、よくあぶらののったにわとりがある？——じゃあそれを二羽とも買うわ。」と、おびの間へ手を入れたと思いますと、

「まあ、いやだ。あたしお金入れをわすれて来たわ。おじさん、すぐとつて来るから、このにわとりはだれにも売らないでね。」と、たのんで、急いで帰いそつて行きました。

ところが、女の子は、それなりいつまでたつても帰つて来ません。とり屋やでは、どうしたのだらうと思っていました。そのうちに見なれないりっぱなさむらいが来て、

「こりやていしゆ、よくこえたにわとりがあるか。」とききました。ていしゆはあの女の子はもう来そうもないので、いつそこのおさむらいに売ってやれと

思って、

「はいはい、ちょうど二羽だけのこっております。へい。」と言いました。さむらいが、ふところから金入れを出しますと、そこへさっきの女の子が走って来て、

「あら、おさむらいさま、そのにわとりはあたしが買ったんですよ。ねえ、おじさん。」と言い、おびの間から赤いきんちやくをとり出しました。さむらいは、目をつり上げて、

「たわけものめ。小むすめのくせにぶれいなことを申すとそのままでは、うそすまさんぞ。」と、どなりました。ていしゆは、あいて相手がさむらいだけに、おろおろしています。しかし女の子は、びくともしないで、

---

「へえ、いくらおさむらいさまだつて、人の買ったものを横どりしようなんて、それはらんぼうだわよ。これは、あたしのものですから、いただいてまいります。」と言つて、きんちやくのひもとときかけます。さむらいはかんかんにおこつて、

「おのれ、言わしておけば、ずにのりおる。にくにくしい小女だ。こおんなそこへなおれ、手うちにいたす。」と刀のつかに手をかけました。ていしゆはびっくりして、さむらいの前に手をついて、

「どうぞ、おゆるしなすつて下さいまし、まだ年のいかない小むすめのごことでございます。どうぞ、ごかんべんなすつて下さいまし。」と、ひらあやまりにあやまったのち、

---

「これこれむすめさん、いくらあんたが先に買ったと言ったって、おさむらいさまに向か<sup>む</sup>つて口がすぎますぞ。」とたしなめました。そして、あらためて二人に向かつて

「このにわとりは、お二人に一羽ずつ、ただでさし上げることになりました。どうぞ、これで、うらみつこなしにお引上げ下さいまし。」と、ぺこぺこしながら、にわとりをさむらいと女の子に一羽ずつわたしました。

さむらいはやつと気を直して、にわとりをぶら下げて帰りました。女の子もにわとりをかかえて、さむらいの後から同じ方へ帰って行きました。

「やれやれ、とんだ目にあつて、ひどいそんをしてしまった。」と、ていしゆは、ぶつぶつ言いながら、二人のうしろすがたを見おくりました。と、向<sup>む</sup>こう

の草むらから大きな黒犬がとび出して、ワンワンほえたてながら二人にとびかかりました。と、おかしなことに、さむらいは女の子の手を引いて、村はずれの山の方へどんどんにげて行きました。何にも知らないとり屋やは、

「へえ、あんな犬を見てにげ出すなんて、おく病びょうなさむらいだな。あつはつは。」とわらいました。

犬にほえたてられた二人は、まっさおになって山へにげて帰りました。

「ほう、あぶなかつたな。」

「もう少しで、化けばの皮かわをむかれるところだった。あつはあ。」と、二人は、元の体にかえって、むな元をなで下ろしました。

「さあ、いたちどん、ぽつぽつはじめようよ。やはり丸やきにするのが一番う

まいだろうね。わしが羽をむしるから、おまいはかれえだを集めておいでよ。」  
と、たぬきは言いました。いたちは外へ出て、たき木をどつさり拾い集めて帰  
りました。まどからひよいとのおぞきますと、たぬきは大あぐらをかいて生のに  
わとりのももを、がつがつかじっていました。

「おのれ、このずるたぬきめ、おぼえてろ。」と、いたちははらをたてて、家  
へ入るなり、

「たぬきどん、大へんだ大へんだ。おまいさんの家が大火事だ。子だぬき三人  
は黒こげになって死んでるよ。おかみさんは、背中にやけどをして、草の中で  
うなっている。おまいのおふくろは、口の先のとんがったところへ火のこが飛  
んで、びっくりして気ぜつしたよ。早く帰って水をおかけ。まだどんどんもえ



てるよ。」と、だましました。たぬきはびっくりして、かけ出しました。いたちは二羽のにわとりを丸焼きやにして、ひとりでみんな食べてしまいました。

いたちにだまされたたぬきは、くやしくてたまりませんでした。それで、あるばんこつそりいたちの家へどろぼうに入って、れいの手ぬぐいをぬすみ出して、だれにも分らないところへかくしてしまいました。手ぬぐいのなくなつたいたちは、それから、てんで化ばけることが出来できなくなつてしまいました。今でもいたちは、くやしそうに、あっちこつちをちよろちよろかけまわって、手ぬぐいをさがして歩いています。でも、手ぬぐいはなくしても、自分ぐらいきれいなけだものはないと、今でもうぬぼれています。村の子どもたちは、いたちを見つけると、

---

「いたちの、いい顔。」

いたちの、いい顔。」

と、大ごえでうたいます。すると、いたちは立ちどまっては、きよろきよろふりかえりして、いい顔を見せるのがおきまりです。

